調査報告　越冬期2022・②　調査結果報告

今年の１月、東京都本土部の全自治体を対象に行った『越冬期 2022』調査の概要は前号で報告しました。今回はその続きとして、その成果の一部をお知らせします。調査は「水辺」を中心に実施しました〔上図・東京都の範囲を赤線で囲み、調査地点を●印で示しました〕。なお、コロナ禍の影響で、荒川区・中央区・武蔵野市での調査は実施しませんでした。

今回記録された鳥は、前号に記した 98 種に、キジ・クイナ・タシギ・コガラ・ヒバリを追加し、15 目 34 科 103 種となりました。その内訳は、キジ科（2 種・以下同じ）カモ科（20）カイツブリ科（3）ハト科（2）ウ科（2）サギ科（5）トキ科（1）クイナ科（4）アマツバメ科（1）チドリ科（1）シギ科（5）カモメ科（2）ミサゴ科（1）タカ科（6）カワセミ科（1）キツツキ科（3）ハヤブサ科（2）サンショウクイ科（1）モズ科（1）カラス科（4）シジュウカラ科（3）ヒヨドリ科（1）ウグイス科（1）エナガ科（1）メジロ科（1）セッカ科（1）ムクドリ科（1）ヒタキ科（6）スズメ科（1）セキレイ科（5）アトリ科（5）ホオジロ科（6）インコ科（1）チメドリ科（1）その他アヒル・交雑種　**【調査者一覧②】今関一夫氏**

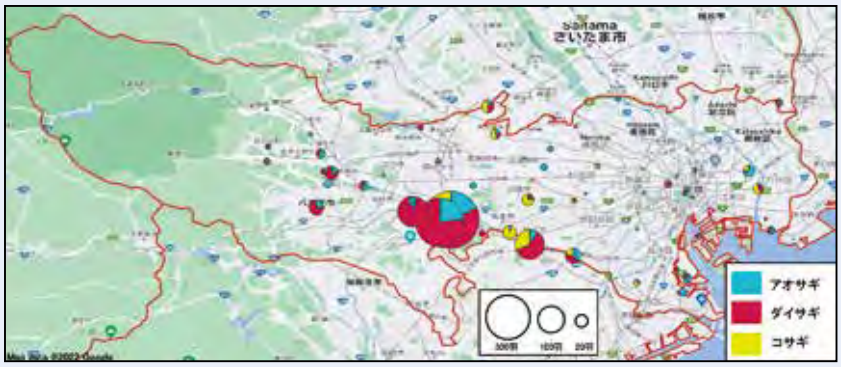
この冬の特徴は、多くの調査者が、公園などで“冬鳥の影がうすい”と感じたことでした。具体的にはツグミやシメなどの数が少ないことがその原因のようです。

場所別では、江戸川区の葛西臨海公園では、カンムリカイツブリは増えたが、スズガモが減っている。大田区の森ケ崎の鼻干潟ではコガモが多く、ヒドリガモが少ない。新宿区の外濠ではハシビロガモが増えているなどの報告がありました。≪詳しくは、当会の研究部のホームページをご覧ください≫

【考察・その１】猛禽類

最近の傾向として、猛禽類の種類・個体数が多いことが挙げられます。今回の調査でも９種類が記録されました。以下は、種類･記録箇所数を列記します。出現場所数が多い順に、トビ（20 か所･以下同じ）オオタカ（17）ノスリ（11）ミサゴ（10）ハイタカ（7）チョウゲンボウ（6）チュウヒ・ツミ・ハヤブサ（各１）となっています。かつては考えられなかった状況です。一方、同じ猛禽類でもフクロウ類となると記録は“０”です。かつては多摩川・荒川の河川敷、東京湾の埋立地から、コミミズクやトラフズクの記録が寄せられていましたが、ここのところどこも記録が少なくなっているようです。　〔川内 博〕

【考察・その２】サギ類



コサギが清瀬、西東京、三鷹、府中、町田という縦ラインに出現しています。小河川や池で記録が多いので、この縦ラインより山側にそういう環境が少ないためかもしれません。それと多摩川上流にいないことも合わせると、コサギは流れが緩い河川か止水という環境を好んでいると言えそうです。それから、この３種のうち、郊外ではダイサギが最も多く記録されました。一方、都心ではサギ類が少ないのですが、アオサギが記録されている調査地が多くなっていました。〔神山和夫〕

【考察・その３】ハクチョウ・カモ類

カモ類で記録地点が多かったのは、カルガモ 60 地点、オオバン 42 地点、コガモ 38 地点でした。このうちカルガモは公園の池での記録が多く、オオバンとコガモは河川、特に多摩川で多く記録されていました。多摩大橋付近でコハクチョウが８羽記録されました。この小群は１～３月までこの場所で観察されていて、これほどの長期滞在は近年に例がないように思います。〔神山和夫〕

『繁殖期 2022』調査、66 か所で順調に進行中

この５月～６月にかけて、越冬期と同じように、東京本土部の全自治体に１か所以上の調査地を設定し、繁殖期調査を実施しています。

越冬期と違うのは、水辺にこだわらず、野鳥にとって生息環境がよさそうな場所を選んだことと、１時間以上の調査を２回行うということです。東京湾岸から雲取山までの 66 か所で調査が進んでいます。調査の皆さんはボランティアで、日本野鳥の会奥多摩支部の有志の方のご協力もいただいています。

進行中の状況は研究部ホームページ〔下記〕にアップしています。

http://www.yacho-tokyo.org/birdstudy/

明治神宮のキビタキ
〔2022 年５月・中村文夫氏撮影〕